



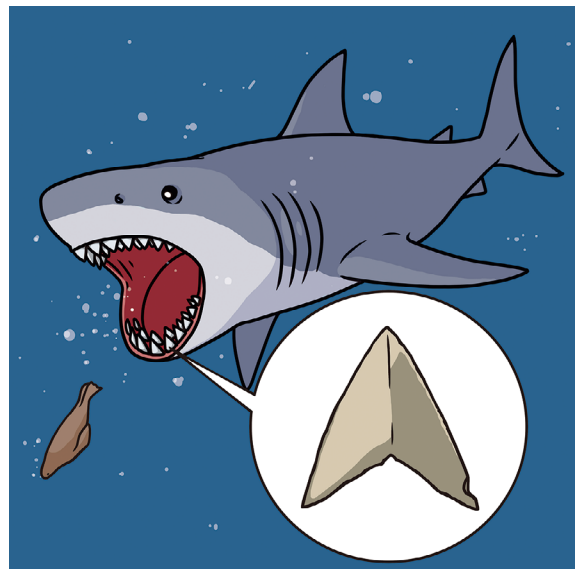
第3章 東松山市の歴史文化の特性

東松山市に固有の歴史や文化にまつわる特性として、下記の八つの特性が挙げられます。

① 葛袋の化石と湧水地

東松山市には化石産出地や湧水などの地質学的スポットがたくさんあり、悠久の時間をかけて生じた地殻変動や生物の進化などを知ることができます。

市域の地質を観察すると、1,600万年前から現在に至る、海の底が陸になるようなダイナミックな地殻変動の痕跡を知ることができ、また産出する化石からは当時の環境や絶滅した生物の営みを知ることができます。市域の台地は、1,600～1,100万年前に海で堆積した地層（新第三系）の上に、13万年前以降に河川の働きで堆積した段丘礫層（第四系）が不整合で重なる構造で、この礫層が帯水層となっており、段丘崖の新第三系との境界などから湧水が見られます。



② 丘陵・台地・低地・河川

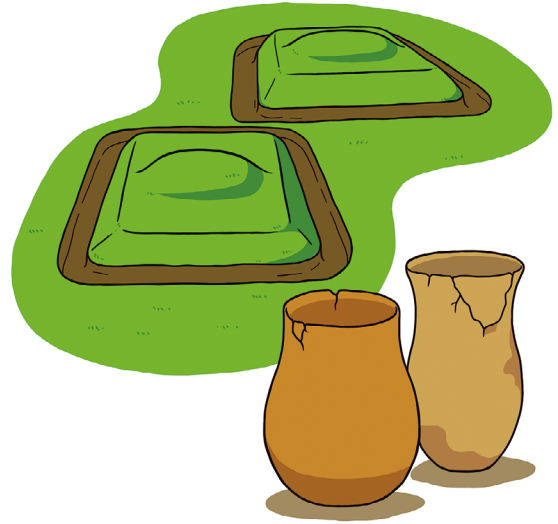
悠久の時を経て形成された東松山市域の地形は、丘陵から台地、低地へと変化に富んでいて、市域に住まう人々の歴史はこうした地形を上手に生かしながら紡がれてきました。

丘陵に形成された谷津地形は、ため池として谷津田を潤し、台地の崖から湧出する水は生活用水として活用されました。河川の流れは水と土を運び肥沃な農地を生み出すだけでなく、人々の物理的交流の「軸」としても機能してきました。



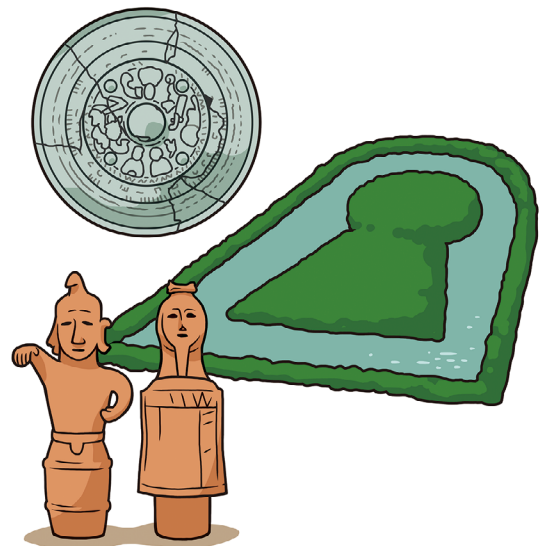
③ 弥生土器の二つの型式と方形周溝墓

埼玉県西部の弥生時代後期を代表する「いわはなしきどき 岩鼻式土器・よしがやつしきどき 吉ヶ谷式土器」の存在は、各所の文化を取り入れながら、独自の文化に昇華させていった変遷を物語ります。また観音寺遺跡の方形周溝墓と遺物は市野川流域を統べる首長の存在を示しており、やがて古墳時代におけるヤマト王権の受容につながる母体となります。



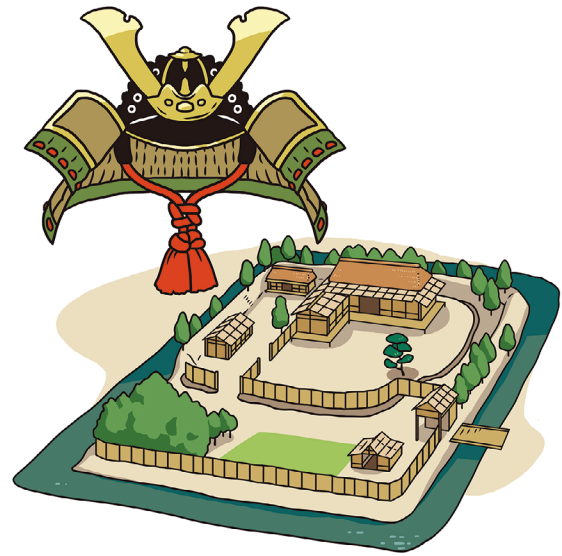
④ 600基の古墳

東松山市域には県内最古の根岸稲荷神社古墳から始まり、古墳時代全時期を通して古墳が築造され続けました。あわせて古墳の被葬者が支配した集落が数多く存在します。全国でも数点しかないもの、県内で東松山市にしかないものなど、非常に多くの古墳時代に関する文化財があり、古墳時代の隆盛を物語ります。



⑤ 城と館と名字の地

鎌倉幕府を支えて活躍した武蔵武士の名字と同じ地名が現在も市内に残っています。これらは「名字の地」と呼ばれ、武士が自分たちと土地を結び付けて守ろうとした証です。南北朝の政治的動乱期には、館を城に改修していった様子も、近年の発掘調査により明らかになり、当時の緊張状態を今に伝えます。戦国時代の武士たちについても、松山城主^{まつやまじょうしゅ}上田氏^{うえだ}を中心に、関連する文化財が数多く残されています。



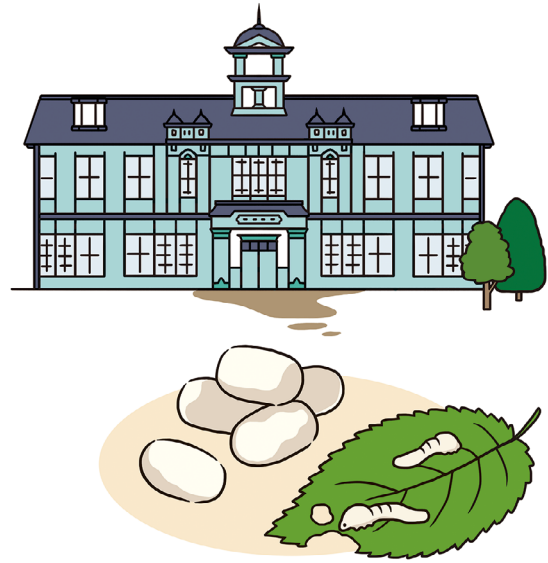
⑥ 三つの街道と二つの宿場

東松山市域は三つの街道が江戸・川越方面と秩父方面と日光方面へ向かう分岐点にあたり、高坂宿^{たかさかしゆく}と松山宿^{まつやましゆく}の二つの宿場が整備されました。往来が活発になると正法寺^{しょうぼうじ}は観音霊場の札所めぐりで栄え、正法寺と次の札所を結ぶ観音道が三つの街道と接続し、活発な人・物の交流の大動脈として機能しました。こうした町の構造は、現在の市域の交通網や土地利用のベースになっています。



⑦ 近代教育施設と産業

東松山市には、日本の近代化に大きな役割を果たした施設や設備が現存し、旧^{きゅうさいたまけんりつ}埼玉県立松山^{まつやま}中学校^{ちゅうがっこう}校舎の格式高い洋風の意匠は、教育の普及に力を入れていた時代の進学率向上を願ったものです。またレンガ生産を地場産業として普及させようと、レンガ樋管^{ひかん}が盛んに造られました。養蚕を営む農家も増加し、様々な施設も整えられました。山王焼^{さんのおやき}は時代の移り変わりに合わせて製品を変えており、今でも様々な製品が残されています。



⑧ 民俗文化財と地域の絆

東松山市には、江戸時代にさかのぼる様々な無形の民俗文化財が守り継がれていて、これらは現在も地域住民をつなぐコミュニティとして大きな役割を担っています。獅子舞・祭ばやし・餅つき踊りなど、神社の祭事の一つとして、守り継がれているものや、絵馬市のような習俗、フセギのような民間行事もあり、バリエーションに富んでいます。各々目的は違えど、地域住民が主体的に守り継いできたもので、地域を結びつける大きな役割をも担って現在も絆をつないでいます。

